

---

Nuwara Eliya

桜月まき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Nu wara Eliya

### 【ZPDF】

N8316G

### 【作者名】

桜月まき

### 【あらすじ】

紅茶とイラストと短編小説のコラボ企画第2弾です 第1弾は「YUME」をご覧ください。イラストはブログにありますので、よかつたらそちらもご覧くださいね～（^ ^）

とある地下鉄の駅の改札口で、由実子は腕時計と改札から出でくる人々の波とを交互に見て、イライラしていた。：約束の時間は十八時。現在、既に十八時十五分。

：せつかく久々のデートだから、時間通り遅れないように来たのに。

改札から人の波がまた引いていく。この時間の電車にも、彼は乗つていなかつたようだ。

もう…映二が十八時つて言つたから、無理無理中村さんに残りの仕事お願いして出でてきたのに…。こんなんだつたら仕事最後までやつてこれたし、中村さんにイヤミ言われずに済んだのに…。

ふう、と怒り混じりの短いため息をつく。もう、何度目かわからぬい。

改札は次の電車から降りてくる人でごつた返す。由実子は咄嗟に彼の姿を探すが、どうやら反対側のホームから押し寄せる人のようだ。こっち方面から彼が来ることはない。

由実子のイライラはどんどん膨らんでいく。

口を尖らせながら映二の携帯に電話してみる。けど、さつきからずっと留守電サービスセンター。圏外にいるのか、電源を切つてあるのか、どちらにしても連絡が取れない。

遅れるなら遅れるつて、連絡くれるにしてくれればいいのに……。

携帯をバッグに戻す。その時ふと、足元のストッキングに目がい

つた。

… そういえば、今日は朝からシイでなかつた。寝坊していつのも電車に乗り遅れるし、ギリギリ会社に間に合つたのはいいけど、書類のケアレスミスで上司に怒られるし、訂正しようと慌ててデスクに戻らうとしたらゴミ箱につまずいてストッキングが破れるし、社食のお昼ご飯もいつもお気に入りのメニューが売り切れだつたし、中村さんにイヤヤミ言われるし…。ストッキングだつて、ここに来る前に急いでコンビニでテキトーなのを買つたけど…こんなに時間があるつてわかつてたら、デパートに寄つてちょっとオシャレなストッキングを買つたがつた。

どんどんどんどん、嫌なことばかり思つてくる。それもこれも、映二のせいだ。映二が遅れてくるから…。

と思つていたらバッグの中で携帯が振動した。

映二だ！

急いで携帯をバッグから取り出して、電話に出る。

「映二… 今どい？ 約束十八時だつたよねえ？」

やつぱつと音を立てる方になつてしまつた。久しづつの「トーン」。

『「あん由実子。仕事長引こちやつて… もうちょっとかかるんだ。』

「ええ～…もう既に一十分遅刻なのに…まだ遅れるの？！」

『だから「もうんつて。そこでずっと待つでもらうのも悪いからさ、移動してもうつてもいいかな？』

「…ビルで…」

『もう一回地下鉄乗つて、K駅で降りて。2番出口から出でまわって、大通り下りの坂道を真っ直ぐ行くと、音楽教室と写真屋がある、その隣に Tea Room \* LUPINUS っていう喫茶店があるから、そこでお茶飲んで待つててよ。ここからだとそつち行くほうが早いから。』

また地下鉄乗るの？ だつたら最初からそこで待ち合わせしておけばよかつたじやない…。そう思つたけど、その言葉を飲み込む。

「…わかつた。メールで今の、そのお店の場所、もう一回送つて。とりあえず駅に向かう。」

『悪い。なるべく最速で行くから。』

通話を終える。むー…と由実子は不機嫌顔。

…仕事とわたし、どっちが大事なの？…なんて、馬鹿馬鹿しいセリフは吐きたくないけど。思つちゃうよね、一瞬。

…でもセリフでふてくされても仕方がないので、しぶしぶ由実子は改札へ向かう。

K駅に着いた時、映二からメールが入った。さつき書っていたお店の場所を事細かに書いてある。由実子はその通りにその道程を進つていく。K駅で降るのは、初めてだ。

地下鉄の中でもずっと、朝からの一連の嫌なことばかり浮かんできて、由実子はぐつたりしていた。初めての田新しい町並みには目もくれず、由実子は重い足どりで不機嫌なまま歩き続ける。

しばらく歩くと、映二が指定したお店へしき店舗が見えてくる。音楽教室、写真屋さん…の隣、ログハウスっぽい木の外装の、オシャレなカフェ。入り口のドアには流木を使ったドアノブと、さりげないフレートが掛かっており、そこに Tea Room \* LUPHINUS と書いてある。

いいだ。

確認してから、ふと思つ。

…映二はどうしてこんなオシャレなお店を知ってるんだろう。K駅なんて、映二もあまり来ないはず…。ひょっとしたら、元カノとかと来ていたんだろうか？

なんてくだらない嫉妬をしつつ、由実子は流木のドアノブを押して、店内に入る。

「いらっしゃいませー。」

シャラシャラシャラ…と耳に心地のよいウインドベルの音と同

時に、男女一人ずつの店員さんの声。カウンターにいた女性の店員さんが、由実子を見つけて微笑みかける。

「いらっしゃいませ。…お一人様？」

「あ、いえ…後からもうひとり来ます。」

カウンターの女性店員…由実子より五・六歳年上だろうか、落ち着いた物腰の飾らない美人という感じだ。彼女の笑顔で、由実子のモヤモヤした嫌な気分が少しだけ消えていく。

「ああ、待ち合わせね。…ごめんなさい、今、テーブル席いっぱい…。カウンターでもいいかしら？ 席が空いたら移動していただく、つて形で。」

にこにこ、彼女の笑顔にノーとは言えず、由実子はカウンター席に座る。

座りながら、店内を見回してみる。店内も外装と同様、木のぬくもりがある。由実子が座っているカウンター席が五席と、その右奥に一人掛けの席が三組。なるほどテーブル席は満席で、由実子と同年代の女性二人連れが二組、そして大学生風のカップルが一組。カップルの客に、もう一人の男性の店員がオーダーをとっている。

インテリアもかなりオシャレだ。明るいナチュラルウッドの椅子とテーブルも手作り感のある温かみがあり、椅子にはグリーン地にイエローの細かいストライプのクツショーンが敷いてある。木の枠がオシャレな窓辺と各テーブルには、清楚な白いミニバラが小さなガラスの一輪挿しにちょこんと納まっている。…女の子が喜びそうな、可愛らしいお店。実際女性客が大半を占めているのにも頷ける。

映「ほほんとこなんで」のお店知ってるんだね。また、さつきと同じことを考えてしまつ。…きっと、元カノと来ていたに違いない。ぐだらないとはわかつていながら、嫉妬が確信に変わつてしまつていて。

「お連れの方が来るまで、何か飲んでる?」

カウンターからさつきの女性店員が由実子に声を掛ける。おかげで嫌な思いの堂々巡りから意識がそれた。

「あ、はい。ありがとうございます。」

そういうつて由実子が立てかけてあるメニューを手にしようとするとい、カウンターの彼女は由実子より先にメニューを取り上げて、いたずらっぽく笑う。

「オススメの紅茶があるんだけど、それにしてもいい?」

「オススメ?」

きょとん、と由実子が聞き返すと、彼女は笑つたまま、頷く。

「今のあなたにピッタリな紅茶があるんだけど…どう?」

初対面の客にこんなフランクに話しかけるなんて。しかもメニューを見せずに紅茶を勧めるなんて。思わず面食らつてしまつて、どうしていいかわからない。

するとオーダーをとつてきた男性店員がカウンターに戻ってきて、

彼女にオーダーを伝えながら苦笑する。

「…多嘉子さんまた人のメニュー勝手に決めて…。困りますよねえ？」

男性店員は由実子に笑いかける。

「はあ…。」

「でも多嘉子さんの“オススメ”、ハズレなしですよ？ 多嘉子さん、オススメってなんですか？」

男性店員が尋ねると、“多嘉子さん”と呼ばれた彼女は嬉しそうに、そして楽しそうに答える。

「ヌワーラ・ヒリア。マハガストック。」

…紅茶のことをよく知らない由実子には、なんだか呪文のような名前。由実子が男性店員の顔を見上げると、彼は納得したような笑みを浮かべてこる。

「なるほど。さすがですね。」

そして彼は由実子の手を覗き込むよつて言ひ。

「…オススメです。」

「…じゃ、じゃあそれで…。」

一人がかりでそこまで勧められると、注文せざるを得ない。まあ

いいが、オススメなんだし、と由実子は苦笑。

するとカウンターの中でティーポットに茶葉を入れはじめた“多嘉子さん”がにっこり笑う。

「やつと笑顔になつた。」

「え？」

由実子はそう言われて自分の顔を両手で包む。

「お店に入つてきた時から、ずっと口ワイ顔してたから。」

「そ……そつ、ですか？」

急に顔面が熱くなる。図星だ。そんな由実子を見て、多嘉子はふふ、と大人っぽい笑みを口元に浮かべる。ケトルでお湯を沸かしながら、慣れた手つきで他のオーダーの茶葉を缶から出して、ティーポットに入れる。

「嫌なことがあつた時つて、他の嫌なことも思い出しちゃつたりして、イモヅル式に嫌な気分になっちゃうのよね。」

多嘉子が言つた、まさにその状態に自分が陥つていふことに、改めて気づく由実子。朝から一連の嫌なことを通り過ぎて、過去の嫌なこと…映一が前も遅刻してきたこととか、些細なことで口論になつたこと…今関係ないことまで、由実子を嫌な気分にさせていた。

「…そなんですね…。」

つぶやくと、多嘉子がまたにっこり笑つて、沸騰したてのお湯をティーポットに注ぎ始める。もつひとりの店員さんも、洗い物をはじめているし、多嘉子も無言で砂時計の砂が落ちるのを眺めている。多嘉子につられて由実子も砂時計を見つめる。

静かに、さらさらと、砂が落ちていく。

…ぼーっと無心で砂が落ちていくを見つめていると、さつきまでのイライラした自分がすうっと消えていくのがわかつた。怒りとか、イライラとか、嫌な感情が、時間の経過と共にどこかへ行ってしまう。

砂が落ちきつて、多嘉子は素早くティーポットから紅茶をカップに注ぐ。白地に青の上品な花柄。由実子の好きな、ロイヤルコペンハーゲンのカップだ。由実子は少し嬉しくなる。そして多嘉子はにっこり微笑んで、由実子の目の前にそのカップを差し出した。

「お待たせしました。ヌワラエリア、マハガストックです。」

ほんわりと湯気をあげながら、白いカップの中で金色に輝く紅茶…どことなく、縁っぽいような気もする。湯気と共に由実子の嗅覚をくすぐる、上品で纖細な香り…すーっと、ハーブのような爽やかな香り。

カップを持ち上げて、飲んでみる。ふわあと口に広がる、心地よい渋み。見た目の纖細さからは想像できない、力強いイメージだ。…目が覚める。というか、目が醒める、といったほうがいいのだろうか。すっと、体の中を爽やかな風が吹き込むような感覚。

「…美味しいでしょ？」

多嘉子がいたずらっぽく、チャーミングに笑いかける。由実子はうとうと、と無条件に頷く。

「なんか…気分がスッとする…田が醒める、つていつか。」

「うん、田が醒める…視点を変える、紅茶。気分転換、つていつのかな?」

氣分、転換…。

「嫌なことにハマっている時つて、さつきも言つたけど、嫌なことばっかり思い出すじゃない? そういう時は、気分転換。視点を変えるの。“嫌なこと”から田を醒まして、気持ちいい場所に、戻つてくる。マイナスのあるところには、必ずプラスだってあるから…そつちの方に視点を合わせれば、いい気分になれる。」

マイナスのあるところには、必ずプラスがある…?

由実子は考へてみる。ヌワラエリアを飲みながら…不思議と、一口、また一口飲むたびに、頭がスッキリしてくる。

…映二が十八時に待ち合わせだって言つたから、中村さんに無理言つて仕事お願いして出てきた…。中村さん、イヤミは言つたけど、ちゃんと仕事、引き受けてくれた。だから十八時に間に合つようつて駅に着けた。

朝だつて、寝坊して電車に乗り遅れたけど、ギリギリ会社には間に

に会った。

それから映一。…四月に異動があつて、なれない部署での仕事、忙しいつていうのはよく知つてゐる。忙しいのに、ちゃんと今日は会つてくれる。仕事が長引いてるならキャンセルだつてアリなのに…。待つてろつて、言つてくれている。

そしておかげで初めてK駅で降りて、こんなお店があるのを知つて、こんな美味しい紅茶を飲んでいる…。

「だんだんいい気分になつてきた?」

由実子の表情を見て、多嘉子が笑う。由実子は頷いて、微笑み返す。

「彼氏に…待ち合わせ、遅刻されて…」ここで待つてろつて言われて…イライラしてたんです。でも、彼に遅刻されなかつたら、わたしはこのお店に来なかつた。このお店には出会えなかつた。この紅茶にも…。ありがとうございます。」

「お礼ならその彼に言つたのね。素敵な彼じゃない。このお店を選んでくれるなんて。…あら?」

多嘉子がそう言ひながら入り口のドアに目をやつた。つられて由実子も振り返る。と、シャランシャラン…とワインドベルの音を立てながら、映一が入つてくるといひだつた。

「映一。」

自然と由実子は嬉しそうな表情になつてゐた。さつきまで映一と

の嫌なことなんか思い出したりしていたのに。

由実子が映一の名を呼ぶのと、一人の店員が顔を見合させて笑うのと、ほぼ同時だった。由実子はびっくりして、映一とお店の一人の顔をかわるがわる見る。…え？ 知り合い…なの？

「なんだ、“彼”って、映一くんのことだったんだあ。“素敵な彼”とか言って損した。」

「お久しぶりです多嘉子さん。…と、木下。まだここにバイトしてんの？」

親しげに話をしながら、由実子の隣に座る映一。由実子がきょとんとして映一を見ていると、映一が笑う。

「…ああ、学生の時、ここでバイトしてたんだ。木下は大学の同級生。」

言われて由実子は思わず大笑い。元カノと来てたに違いない、だなんて。自分のマイナス妄想にあきれてしまつ。もつ、ここには笑うしかない。…ほんとに…嫌な気分の時つて、馬鹿なことばっかり勝手に考えて、自分で自分をさらに嫌な気分にしてるんだ…。

「？ 何が可笑しいの？」

不思議そうに尋ねる映一に、由実子は優しい笑顔で言った。

「なんでもないよ。お仕事、お疲れ様。」

嫌な気分の自分は、もつ、どこにもいなかつた。かわりに、そこ

には暖かい雰囲気のお店と、笑顔あふれる店員さんたち、お気に入りのカップに美味しい紅茶と、大好きな彼。そして、笑顔で晴れやかな気分の自分… 幸せな空間が、由実子の前に広がっていた。

由実子はまたヌワラエリアを一口飲んで、心の中で、思う。  
由を醒ましてくれて、ありがとう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8316g/>

---

Nuwara Eliya

2010年10月11日11時49分発行